

『外科室』 泉鏡花

「看護婦、メスを」

「ええ」と看護婦の一人は、目をみはりて猶予えり。一同斎ひとしく愕然がくぜんとして、医学士の面おもてを瞻みまもるとき、他の一人の看護婦は少たしく述べながら、消毒したるメスを取りてこれを高峰に渡したり。

医学士は取るとそのまま、靴音くつおと軽く歩を移してつと手術台に近接せり。

看護婦はおどおどしながら、

「先生、このままでいいんですか」

「ああ、いいだろう」

「じゃあ、お押え申しましよう」

医学士はちよつと手を挙げて、軽く押し留め、

あ

「なに、それにも及ぶまい」

謂う時疾くその手はすでに病者の胸を搔き開けたり。夫人は両手を肩に組みて身動きだもせず。かかりしと医學士は、齧つがゝく、深重嚴肅たる音調もて、

「夫人、責任を負つて手術します」

ときに高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「どうぞ」と一言答えたる、夫人が蒼白なる両の頬に刷けるがごとき紅を潮しつ。じつと高峰を見詰めたるまま、胸に臨めるナイフにも眼を塞がんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、
さと白衣を染むるとともに、夫人の顔はもとのご

とく、いと蒼白^{あおじろ}くなりけるが、はたせるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

「」との「」に及ぐるまぢ、医博士^{いふく}の拳動脱兎^{だつと}の「」とく神速にして、さか間なく、伯爵夫人の胸^{かん}を割くや、一回はもとよりかの医博士に到るまで、言^{ことば}を挿しはむべき寸隙^{すんげき}ともなかりしなるが、「」においてか、わななくあり、面^{おもて}を蔽^{おお}うあり、背向^{そがい}になるあり、あるいは首^{いの}を低^たるるあり、予^{いた}の「」とせ、われを忘れて、ほとんど心臓まで寒くなりぬ。

三 秒^{セコンド}にして渠^{かれ}が手術は、ハヤその佳境^{かきよう}に進み

つつ、メス骨に達すと覚しきとせ、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返り

さえもえせずと聞きたる、夫人は俄然器械^{がぜん}の「」と

く、その半身を跳ね起しつつ、刀取れる高峰が
右手の腕に両手をしかと取り縋りぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸けて伯爵夫人は、がっくりと仰向つ
つ、凄冷極まりなき最後の眼に、国手をじつと
瞻て、

「でも、あなたは、あなたは、私を知りますま
い！」

謂つとき晩し、高峰が手にせるメスに片手を添
えて、乳の下深く搔き切りぬ。医学士は真蒼にな
りて戦かつて、

「忘れません」

その声、その呼吸、その姿、その声、その呼吸、
いき

その姿。伯爵夫人はうれしげに、じとあどけなき微笑を含みて高峰の手より手をはなし、ぱつたり、枕に伏すとぞ見えし、^{えみ}脣^{くちびる}の色変わりたり。

そのときの二人が状^{さま}、あたかも一人の身辺^{そば}には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきが^ごとくなりし。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとにしています（一部加工しています）。

「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>